

漢詩の四季 日本の四季

横浜国立大学准教授 高芝麻子

【はじめに】

〔資料1〕南朝「子夜四時歌」

「春歌」二十首より

杜鵑竹里鳴 梅花落滿道 燕女游春月 羅裳曳芳草

「夏歌」二十首より

暑盛静無風 夏雲薄暮起 携手密葉下 浮瓜沈朱李

「秋歌」十八首より

涼秋開窓寢 斜月垂光照 中宵無人語 羅幌有双笑

「冬歌」十七首より

天寒歲欲暮 朔風舞飛雪 懷人重衾寢 故有三夏熱

〔資料2〕『万葉集』卷十

「春相聞」四十六首より

春されば しだり柳のとををにも 妹は心に乘りにけるかも

「夏相聞」十七首より

霍公鳥ほくとび 来鳴く五月の短夜も 独りし寝れば明かしかねつも

「秋相聞」七十三首より

我が里に今咲く花のをみなえし 堪へぬ心になほ恋ひにけり

「冬相聞」十八首より

わが背子が言うるはしみ出でて行かば 裳引きしるけむ 雪な降りそね

【一】 四季の分類の意識

〔資料3〕中唐・白居易「寄殷協律」詩（抜粋）

殷協律に寄す

琴詩酒伴皆拋我 琴詩酒の伴 皆我を拋ち

雪月花時最憶君 雪月花の時 最も君を憶ふ

【二】 変化の季節 春秋

〔資料4〕盛唐・孟浩然「春曉」詩

- A 春眠不覺曉 処処聞啼鳥 春眠 曉を覚へず 処処 啼鳥を聞く
B 夜来風雨声 花落知多少 夜来風雨の声 花落つること知る多少ぞ

〔資料5〕晚唐・杜牧「清明」詩

- A 清明時節雨紛紛 清明の時節 雨紛紛
B 路上行人欲斷魂 路上の行人 魂断たれんと欲す
C 借問酒家何処有 借問す 酒家 何処に有りやと
D 牧童遙指杏花村 牧童 遙かに指す 杏花の村

〔資料6〕盛唐・李白「子夜吳歌 秋歌」詩

- A 長安一片月 万戸擣衣声 長安 一片の月 万戸 衣擣つ声
B 秋風吹不尽 総是玉関情 秋風 吹き尽さず 総て是れ玉関の情
C 何日平胡虜 良人罷遠征 何れの日か胡虜を平らげて
良人 遠征を罷めん

〔資料7〕中唐・韋応物「秋夜寄丘二十二員外」詩

- 秋夜 丘二十二員外に寄す
A 懷君属秋夜 散步詠涼天 君を懐ひて秋夜に属す
歩を散じて涼天を詠ず
B 山空松子落 幽人忘未眠 山空しくして松子落つ
幽人忘に未だ眠らざるべし

【三】 停滞の季節 夏冬

〔資料8〕 晚唐・高駢こうべん「山亭夏日」詩

- A 緑樹陰濃夏日長 緑樹陰濃かにして夏日長し
- B 楼台倒影入池塘 楼台 影倒さかしまにして 池塘に入る
- C 水精簾動微風起 水精の簾動き 微風起き
- D 滿架薔薇一院香 滿架の薔薇そうび 一院香る

〔資料9〕 晚唐・杜荀鶴とじゆんかく「夏日題悟空上人院」詩

夏日悟空上人の院に題す

- A 三伏閉門披一衲 三伏に閉門し一衲のうを披きる
- B 兼無松竹蔭房廊 兼ねて松竹の 房廊を蔭おほふ無し
- C 安禪不必須山水 安禪あんぜんは必ずしも山水を須もちゐらず
- D 滅得心中火自涼 心中を滅めつし得れば火自おのずから涼し

〔資料10〕 中唐・柳宗元「江雪」詩

- A 千山鳥飛絶 千山 鳥飛ぶこと 絶え
- B 万逕人蹤滅 万逕 人蹤 滅す
- C 孤舟蓑笠翁 孤舟 蓑笠の翁
- D 独釣寒江雪 独り釣る 寒江の雪

〔資料11〕 盛唐・高適「除夜作」詩

- A 旅館寒灯独不眠 旅館 寒灯 独り眠らず
- B 客心何事轉悽然 客心何事ぞ 轉うたた悽然
- C 故郷今夜思千里 故郷 今夜 千里に思ふ
- D 霜鬢明朝又一年 霜鬢 明朝 又一年

【四】 ホトトギスとセミ

- 〔資料12〕唐・白居易「送春帰」詩（抜粋） 自注…元和十一年三月三十日作
- A 送春帰 三月尽日日暮時 春の帰るを送る 三月尽日 日暮の時
- B 去年杏園花飛御溝緑 去年 杏園 花飛びて 御溝緑なり
- C 何処送春曲江曲 何処いずれにか春を送らん 曲江くまの曲
- D 今年杜鵑花落子規啼 今年 杜鵑花とけんか（サツキ）落ち 子規しき啼く
- E 送春何処西江西 春を送るは何処ならん 西江の西
- F 帝城送春猶快快 帝城に春を送るも 猶ほ快快おうおうたるに
- G 天涯送春能不加惆悵 天涯に春を送れば 能く惆悵ちやうちやうを加へざらん

〔資料13〕『古今和歌集』卷十一
ほととぎす 鳴くや五月のあやめぐさ あやめも知らぬ恋もするかな

〔資料14〕松尾芭蕉 ほととぎす 鳴く音や 古き硯箱

〔資料15〕唐・白居易「早蟬」詩

- A 六月初七日 江頭蟬始鳴 六月初七日 江頭に蟬始めて鳴く
- B 石楠深葉裏 薄暮両三声 石楠深葉の裏 薄暮両三声
- C 一催衰鬢色 再動故園情 一ひとたび催す衰鬢の色 再び動かす故園の情
- D 西風殊未起 秋思先秋生 西風 殊なほ未だ起たざるに 秋思 秋に先んじて生ず
- E 憶昔在東掖 宮槐花下聽 憶ふ昔東掖に在りて 宮槐花下に聴くを
- F 今朝無限思 雲樹繞湓城 今朝 無限の思ひ 雲樹 湓城ぼんじょうに繞る

〔資料16〕『古今和歌集』卷十四「恋歌」 紀友則

蟬の聲 聞けばかなしな 夏衣 薄くや人の ならむと思へば

〔資料17〕松尾芭蕉 閑さや 岩にしみ入る 蟬の聲